

Title	私と微生物病研究所附属病院と検診
Author(s)	米澤, 肇
Citation	癌と人. 9 P.7-P.7
Issue Date	1982-03-15
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24097
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

私と微生物病研究所附属病院と検診

米 澤 馨*

昭和39年10月、私の父信二は、まだ堂島にあった、大阪大学微生物病研究所附属病院に入院をした。入院は当時外科医長であった芝茂先生にご相談し、お願いをした結果で、神戸からの転医であり、その病名は不明であった。

「ホジキン病、95%可能性はないと思う、覚悟はしておいてほしい、しかし今は残りの5%に賭けて出来る丈のことをやってみよう。」

敗戦によって在外資産の総てを没収され、利えその年に私達の母を失った父、後妻を迎えれば、将来子供にいらぬ負担をかけるから、と男手一つで5人の男の子を育て、本当にほっと一息ついたときであり、我々子供もこれから父親に出来る限りのことをしたい、と考えていた矢先であり、どんなことをしても生きてほしかった。

芝茂先生の非情な宣告と温い励まし、それから6ヶ月、田口鉄男・藤田昌英・富永健の諸先生に最善を盡していただいたが、40年3月21日、遂に不帰の客となった。

癌による死亡者は現在年15~16万人と承知しており、当時は若干少なかったかも知れないものの何れにしろ、最愛の父をその仲間として鬼籍に入らしめた口惜しさは、何物にも譬えようがなかった。

病院の要請もあり、些かでも医学の進歩に役立つことになれば、と父に詫びつつ献体をした。

商工会議所と云う、一見医学とは何の関係もない職場に身を置き、何か我々で為すべきこと、為し得べきことがないものかと思案をした。

商工会議所法は、第6条に、商工会議所はその地区内の商工業の総合的な改善発達を図るとともに、社会一般の福祉の増進に資することがその目的であると明記してある。

間接的であれ医学の進展に寄與することも立

派な社会福祉の増進（当時の里井専務理事の判断）と医学会に対する会場提供、資金集めなどの協力を行ってきた。

ことに昭和53年10月から、癌に関する学術研究の奨励助成と癌検診の普及をその目的とする財団法人大阪癌研究会と手を結び、大阪産業界をその対象に、検便による潜血反応で消化管の癌を早期に発見する検査の実施を開始した。

家庭の社会の中軸である30歳から65歳の成人層の死因の第1位が癌死であり、その癌の初期には、食道・胃・腸などから出血をおこすものが多く、簡単な検査を、低料金（500円）で行い、早期発見の手がかりを得られるとすれば、企業の従業員の健康維持を補完する意味からも、商工会議所として恰好の仕事であった。

その検診の経過・処置については大阪大学微生物病研究所附属病院の藤田昌英先生が本誌8号にも専門家の立場から詳述しておられるが、開始した昭和53年987人、昭和54年2,996人、昭和55年627人、昭和56年は秋口までに1,820人の計6,430人が受診された。うち430人が要精密検査が必要とされ、胃潰瘍、ポリープを除いて、4人の癌が判明したと聞いている。

癌撲滅のため早期発見早期治療が唯一の予防手段とされている現況では、商工会議所の為し得る仕事はこの段階までであろうが、早期発見早期治療で一人でも多くの方が発見され、一日も早く社会復帰が出来れば仕事冥利と言うものであろう。

*大阪商工会議所 理事・総務部長